編集後記

本学に勤務し三十年以上の時間がたった。この間、多くの先生方の御退職に立ち会ってきた。ちょうど私が赴任した年は、藤村潔先生と入れ替わりだった。それから山田昭夫先生、伊藤敬先生、小笠原克先生、藪禎子先生、青木正次先生、村井紀先生、中地文先生、鈴木直子先生、鈴木智子先生、丸山隆司先生がこの研究室を去って行かれた。昨年度、種田和加子先生、水口幹紀先生が研究室を去られた。研究室の去り方も様々だ。さらにこれから数年間、日文の教員の人の入れ替わりが激しくなりそうである。

自分の退職も近づく中、来し方行く末を考える機会が多くなった。これまで何を成し遂げたのだろうとか、これからどんな人生を歩んでいこうかとか。で、これに関する先達たちの本を読む機会も増えてきた。古代ローマの哲学者セネカの「人生の短さについて」を読む。セネカは皇帝になる前のネロの家庭教師であり、ネロが皇帝になるとそれを補佐する仕事に就くもネロの暴君ぶりに嫌気がさし辞任する。辞職して三年後、セネカはネロ暗殺の謀議に加担した疑いをかけられ自殺に追い込まれる。そんなセネカだが、「人生の短さについて」でセネカは、穀物の品質管理をしている友人に早く仕事を辞めるように勧めている。この文章はセネカがネロの元を離れたあとに書かれている。生業を立てることと、人生の喜びを感じることとの不一致の問題は数千年前から今日に至るまで未解決のテーマのようである。

人文科学系の学問とは、たとえばこうしたテーマを考えるべき学問であろう。本学でも大学改革がいろいろ検討されている。その目的は「どうやったら生き残れるか」についてのことだろう。しかし、そもそも「生き残るべき価値のある学問とは何か」ということが、教育界に対して、この大学に対して、そして私自身に対して実は問われているように感じている。

（揚妻）